

科学基礎論学会・科学史学会共催ワークショップ

「学術誌の電子化と将来を多面的に考える」

司会・オーガナイザー  
松本俊吉 (Shunkichi Matsumoto)  
東海大学

伊勢田哲治 (Tetsuji Iseda)  
京都大学

提題者

伊藤憲二 (Kenji Ito)  
総合研究大学院大学

土屋俊 (Syun Tutiya)  
大学改革支援・学位授与機構

調 麻佐志 (Masashi Shirabe)  
東京工業大学

近年、学術誌（ジャーナル）をめぐる状況には大きな変化が生じている。その中心となるのは学術誌の電子化であり、多くの学術誌がすでに電子版を発行しているのみならず、オンラインのみの学術誌もすでに多く発行されている。一部の出版社は電子ジャーナルをセットで購読する契約（いわゆるビッグディール契約）を推し進め、契約料の高騰が多くで大学で問題となっている。他方、これに対抗するような動きとして、雑誌論文を無償で利用できるように執筆者やジャーナルが公開する「オープンアクセス化」も進んでいる。また、論文の出版前・出版後の評価のシステムも、オンライン化によって、従来の査読システムにとどまらないさまざまな可能性が開けてきた。もうひとつ、学術誌のオンライン化にもなっていて生じているのが、「学術誌情報と他のインターネットリソースの境界の曖昧化」とでも言うべき事態である。研究者の間では、オンラインジャーナルもまた従来の学術誌と同じ権威を持つものとして認知されるようになってきていると思われるが、一般のインターネットユーザーの視点からは、査読を経た論文も個人のブログ記事も、同じように検索してたどり着くウェブページである。ともすればアクセスしやすいブログ記事の方が信頼され影響力を持つことすらありうる。

学術誌は今どんな状況にあり、これからどんな方向に向かうのか。それについてわ

れわれはどのような態度をとるべきなのか。本ワークショップでは、この問題について、大学図書館行政などの現場に近い場所で長年関わってきた言語哲学者の土屋俊氏を講演者として迎え、また、科学史と科学技術社会論のそれぞれの観点から、伊藤憲二、調麻佐志両氏にご講演いただくことで、多面的に迫っていきたい。